

オピニオン

思ふことあり

スポーツジャーナリスト 増田明美



映画「ロッキー4 炎の友情」のワンシーンを思い出してしまった。ソ連(当時)のボクサーが研究機関のような場所で注射を打ちながらトレーニングをし、屈強な肉体を作り上げていく。ドーピングをロシアのすべての選手がやっているわけではないだろう。でも、国家ぐるみのおいがないわけではない。

昨年の名古屋ウィメンズマラソンでロシアのマリア・コノワロワさんが39歳という年齢で優勝し、いたく感動した。しかし「彼女もそつだったの」と思ってしまうことが悲しい。

日本ではドーピングに関して学校教育で教えられ、各競技団体でも厳しく教育されている。でもそれ以前に日本の選手は「ずるい」とはダメ。「正々堂々と戦う」という武士道精神や美学を持っており、ドーピングに手を染めようという考えを持つ人はいない。

過去に処分を受けた日本選手は禁止薬物が入っていることを知らずに風邪薬や貧血の治療薬を飲むというミスによるものだった。ただ、禁止薬物も増えている

成績より若い選手の健康を

ので、今後ますます選手や指導者への情報提供、教育を徹底すべきである。

ドーピング違反でなければ何をやってもいいのだから、そんな疑問を持つことがある。昨今、女子長距離界が抱えている「フェリチン異常値」問題だ。とくにジュニアの選手たち。フェリチンは鉄の吸収と貯蔵に関するタンパク質で、「貯蔵鉄」ともいわれる。

不足すれば鉄が主成分の赤血球(ヘモグロビン)の合成ができなくなり、貧血になってしまふ。逆に、持久系のスポーツで重要なヘモグロビンを増やすには鉄分を取ってフェリチンを増やせばよいことになる。

実業団の監督と話す、「フェリチンの値が基準値の10倍近い500以上で入部してくる選手がいる」と嘆く人は少なくない。「陸上部の先生に貧血の治療だといわれて毎週注射を打っていた」とか、「貧血に効くからと渡された錠剤を毎食後に飲んでいたら」と言っている選手もいるらしい。

愛知県豊橋市の小石マタニティクリニックで思春期スポーツ外来に携わる産婦

人科の宮本由記医師に話をうかがうと「選手は練習によって大量の鉄分が消費されるので、治療が必要な貧血に鉄剤を使用することは問題ありません。ただ、必要以上に鉄剤を内服したり注射したりすると、一時期速く走るためには効果的なように見えますが、その弊害は看過できません」という。

異常数値を示す選手が多い現状には、「貧血治療の域を超えています。貧血になっても『注射すればいいや』だと、貧血だけの問題ではなく、食べない、エネルギー不足、毎月経骨の成長阻害という悪循環になりかねません。選手の健康を考えれば問題は大きいです」と警鐘を鳴らす。

私の知る限り、実業団の監督は選手の健康を考えて注射を打つことや大量の鉄剤を内服することをやめさせている。貧血で走れなくなるが、1、3年かけて食事から鉄分を取る健康な体に戻しているのだ。高校では3年間で結果を出さなければならぬプレッシャーもあるだろう。でも選手の健康を犠牲にしてまで成績を上げるとは許されることではない。

東京五輪を、ジュニア選手の健康をしっかりと考えるきっかけにしたい。インターハイなどの全国大会で試合前に血液検査や尿検査を義務化するのでもいいかもしれない。